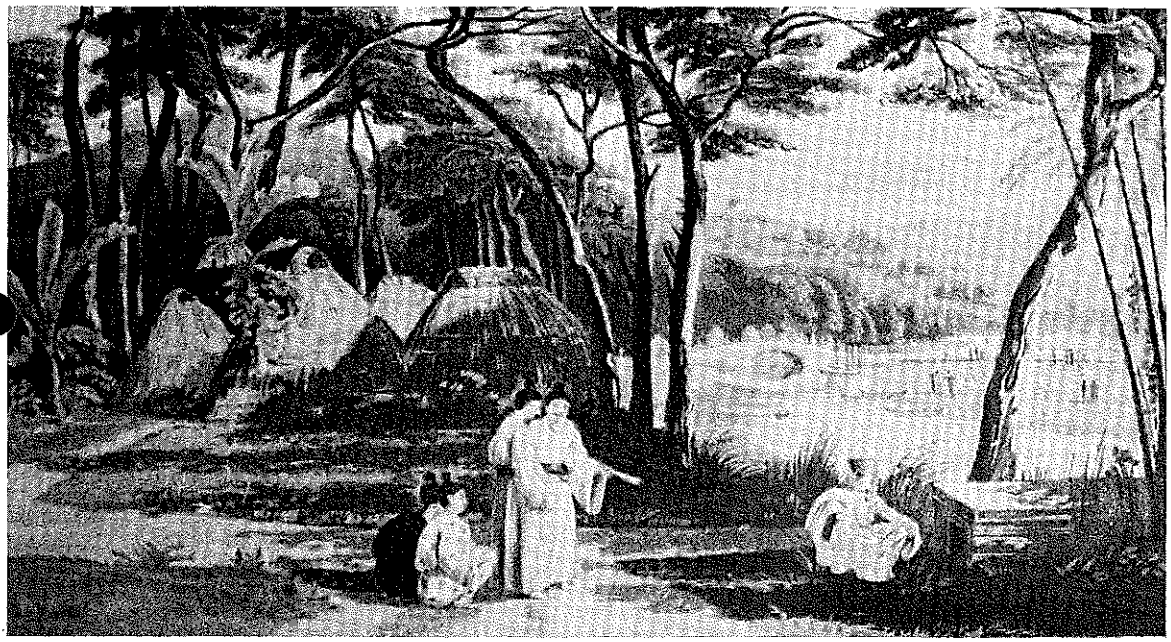
沖縄県立 博物館だより 1979. 8 No. 7



泊港の景「大琉球航海記」のさし絵

バジル・ホール「大琉球島航海記」その他の資料の寄贈を感謝す

館長　外間　正幸

このたびジョージ・Hケア博士からバジル・ホールの「大琉球島航海記」が比嘉副知事を通して当館に寄贈され、また、ケア博士の友人のポール・ブラム氏から、この航海記の挿絵の原画が寄贈された。航海記は1818年にロンドンで出版され、当時の琉球島と琉球の住民のことについて、ヨーロッパ語で欧米人に紹介された最初の本である。原画もまたとないもので、いずれも重要なものである。

さらに、ケア博士の友人ラウラ・シュワルツ・コーン夫人は、彼女の父ヘンリー・B・シュワルツ牧師が1905～1915年にかけて那覇で入手した「黒漆の箱」を寄贈され、ヘンリー・シュワルツの子ウイリアム・レオナルド・シュワルツ氏は彼の父の所有であったチエンバレンの論考「琉球語辞典」を博士を通じて当館に寄贈された。バジル・ホール・チエンバレンは航海記を書いたホールの孫である。

これらの資料は、ケア博士と長年親しくしている日系人ノブコ・オロク・オダさんと一緒の名で寄贈され、このたびオダさんの娘呉屋ジャツキーさん夫妻の訪沖によって、両氏から西銘知事に手渡され、博物館に納まったものである。

漆器は、当時尚家一族の使用した立派なものであり、「琉球語辞典」も貴重な文献である。

これらの貴重な資料を寄贈下さったケア博士をはじめ、ブラム氏、コーン夫人、レオナルド・シュワルツ氏らに心から感謝を申し上げ、同時に、オロク・オダさんやこれらの資料を沖縄まで無事に届けて下さった呉屋夫妻にも心から厚くお礼を申し上げる次第である。

このように、多くの方々の善意によって博物館に納まったこれらの貴重な資料を、当館ではさっそく展示して一般に公開し、かつ、永く大切に保管したいと思う。

特別展　『沖縄の洞穴と洞穴生物』終る
“地底の実験室”を一般に公開!!

展示風景

本県は、大部分琉球石灰岩からなるという地質的特異性もあって、洞穴が非常に多く発達している。県の洞穴実態調査で、現在わかっているだけで、およそ600ケ所だが、その数はまだまだ増えるものと思われる。

人間は、古来から洞穴を住居として、貯蔵庫として、時には信仰の場として利用してきている。本県でも、洞穴はよく利用されており、最近まで風葬場としたり、入口を囲って墓としたり、また去った大戦の時には防空壕として大きい役割りをはたし、さらに洞穴内の水は重要な飲料水として利用されてきている。

洞穴内の鍾乳石などの二次生成物、洞穴堆積物、それに洞穴生物は、地質、古生物、考古そして生物学者の注目のまとになり、洞穴は、まさに温度・湿度が一定に保たれた〝地底（天然）の実験室〟といわれるぐらい重要な所である。さらに洞穴が、どういう過程でできたかを考えることは、島の地史を考えるうえからも重要であり、洞穴が単なる〝ほら穴〟として扱われるべきものではないことがわかる。

しかし、県内の洞穴の現状は、決して芳しいものとは言えない。チリ捨て場になり、屎尿（しにょう）が流し込まれ、さらにひどいのになると洞穴の天井に穴をあけ、鍾乳石類を片っぱしから持ちだし、完全に破壊することが平然と行われている。

上述した洞穴の科学性を調査し、解明するのは、我々の世代だけでは到底不可能であり、また解決できるものではない。そういう意味からも、我々は次の世代のために多くのものを自然のままに残こしてやることは当然の責務と考える。

洞穴が、なぜ大事であり、保護・保存しなければならないのかということについて、これまで積極的に啓蒙された例はなかった。それで、今回は、この〝洞穴〟について少しでも多くの人々に理解していただくために企画したものである。

なお、この特別展を実施するにあたり、県の洞穴実態調査のメンバーである次の方々に多大な協力をいただいた。御芳名を記してお礼にかえさせていただきます。

○下謝名松栄（県立浦添高校教諭）
○新垣義夫（普天満宮禰宜）
○山内平三郎（玉泉洞観光株式会社）
○日越国昭（教育庁文化課）

熱心に見学する小学生

※特別展出品総点数（525点）
(1)写真および解説図パネル……70点
(2)岩石および洞穴生成鉱物……70点
(3)洞穴生物……30種245点
(4)化石……110点
(5)世界各地の洞穴案内パンフレット、その他……30点
※期間　昭和54年6月12日～7月1日
※総観覧数　5,977人

「新収蔵品展」開く

去る5月11日から31日まで、「新収蔵品展」を開催した。これは、53年度に購入、寄贈、収集、寄託された全資料を紹介する目的で毎年開いている特別展である。

53年度は、540点の収蔵資料があり、購入費は約1千万円であるが、中には県指定文化財の「明孝宗皇帝より中山王尚真への勅書」のような重要資料も含まれている。ほかに漆器盆3点、マンモスやナウマン象の臼歯等17点、元禄9年の「琉球地図」、芸能関係資料46点、武器・武具関係資料8点、台湾関係資料10点などがある。

「新収蔵品展」会場風景

寄贈の部では、大里喜誠氏よりの180点にも及ぶ「賞状・辞令書類」をはじめとして、尚裕氏よりの「玉陵石獅子レプリカ」2体、はるばる米国の篤志家から贈られた「戦前壺屋焼陶器」などがあげられる。ほかに大嶺薫美術館からの「シャム南蛮甕」等28点の陶磁器類、小橋川永昌氏よりの自作の「赤絵大壺」、宮城美能留氏よりの「島常賀作玉取獅子」、平良敏子氏より自作の「芭蕉布絣着物」ほか11点の古芭蕉衣類、与儀真助氏よりの民具45点、東恩納千鶴子氏が長崎県で入手した「燕氏の書」、大阪在住の奥田朝造氏よりの「化石類」30点、宮里政章氏よりの厨子甕等24点、永田芳子氏よりの「紅型着物」、浜兼一氏よりの「のろ衣裳、神扇」、山元文子氏よりの「山元恵一作『岬』」（油絵）などが代表的なものとして挙げられる。また、交通世替わりの資料として、三倉工業から「7・30関係資料」の寄贈もあった。「新収蔵品展」ではこのほか館員の収集した資料も合わせて展示し、一般公開した。

当館の絵画実習教室賑わう!!

第65回博物館文化講座は去年に引き続いて第2回〝博物館で描こう〟—高校生対象—のテーマで去る7月28日（土）午後1時から開催された。講師には興南高等学校の与儀達治先生を迎え、下記のねらい、描写対象物を選んで実施した。

〈ねらい〉

多様な出版物にとりかこまれて育った現代っ子達はイラスト面で達者な描写力を持っている。オーソドックスなデッサン指導にあたっているときでも、イラスト的な面をチラッとのぞかせる場合がある。

長い歴史的時間を経過してきた文化財を高校生たちにその両刃の描写力で描かせたい。

活々と、あるいは物静かな作品が出来上ることを期待したい。

〈描写の対象物〉

梵鐘類、鐘楼、石燈籠、建築の礎石、高倉、石獅子（石彫）、首里城正殿龍柱（石彫）、牡丹玉取り獅子、玉陵石獅子（石彫）、化石類、馬艦船模型、進貢船模型、世持橋勾欄羽目（石彫）、高麗瓦、尖底土器、厨子甕等。

実技にはいる前に与儀先生から説明を聞く

当日参加した高等学校の美術クラブは興南高校、沖縄工業高校、豊見城高校、真和志高校、首里高校、糸満高校の6高校に混って松島小学校、南大東小学校、松島中学校のかわいい生徒達の特別個人参加があった。

参加した生徒たちは与儀先生の説明を受けたあと、おもいおもいに描きたい物を選んで熱心に絵筆を走らせていた。

沖博協総会及び研修会を開く

沖縄県博物館協会総会並びに研修会
（石垣市宮平観光ホテル）

沖縄県博物館協会の第３回総会が７月25日、石垣市内の宮平観光ホテル大ホールで開かれた。今総会は、21の館園と個人会員を合わせて43人が参加した。総会に先立ち、内原石垣市長、長田石垣市教育長、前新県八重山教育事務所長のあいさつがあり、53年度の議事に入った。53年度の決算、事業報告を承認のあと、54年度の予算・事業案を決めた。

同日午後は、石垣市立八重山博物館の玻名城泰雄館長が「八重山における博物館の現状と問題点」と題して報告したあと、琉大名誉教授で、県文化財保護審議会長の高良鉄夫氏が「八重山の自然と文化財」のテーマで講演した。

午後は、石垣市立八重山博物館見学にうつる。同館では、ちょうど「八重山の自然」展を催しており、参加者の間で好評であった。夜は同市宮良の豊年祭見学に全員出席した。

２日目は、午前中竹富島観光並びに喜宝院蒐集館見学をする。上勢頭館長自らの館内説明を受ける。午後は、川平の琉球黒真珠センター、白保の八重山琉染、大川の宮良殿内を見学。夜６時からは、市内のレストランにおいて懇親会を催した。会員のほか石垣市の長田教育長をはじめ、牧野清氏ら八重山博物館協議会のメンバーも集まり、盛会のうちに２日間の幕を閉じた。

画期的な「沖縄の古窯」展

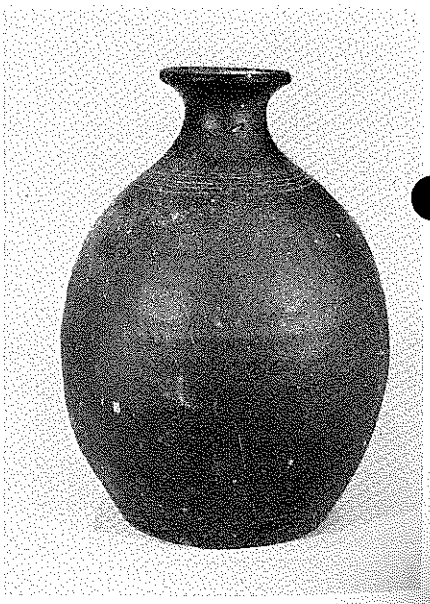
県内ではじめての「沖縄の古窯」展がやちむん会主催、当館・沖縄タイムス社・琉球新報社後援で来る10月２日（火）～10月14日（日）まで特別展示室で開催される。

同展は古くは高麗瓦、大天瓦等から喜名古窯、知花古窯、宝口古窯、湧田古窯、古我知古窯、初期壺屋窯そして宮古島の土器、八重山のパナリ焼と宮良窯に至るまで県内の古窯とその製品を文字通り総まとめするかたちで展示構成される。これまでこの種の展覧会は行われたことがなく、それだけに一般の期待も大きい。

やちむん会では今年結成10周年を迎えるにあたり、今日までの調査研究の集大成を目指して会員一同はりきっている。同展には未公開の新資料を展示する一方、これまで行われなかった壺屋の御拝領窯すなわち荒焼の「南ぬ窯」と上焼の「東ぬ窯」の実測図を作成したり、新しい見解を盛り込んだデーター、また実験的に古陶を再焼成するなどユニークな研究資料を多く取揃えるという。

目下、出品物の選定、資料撮影とあわせて図録『沖縄の古窯』作成の仕事にとりかかっている。

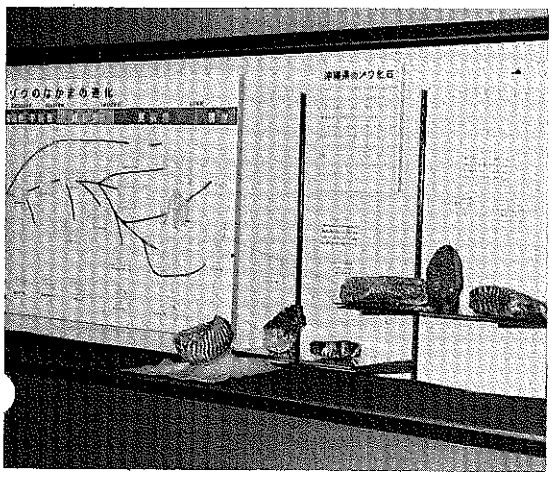
なお、同展会期中、第67回博物館文化講座パネルディスカッション「沖縄の古窯を語る」（10月６日(土)午午２時30分～４時30分）が開らかれる。



知花焼徳利
17世紀初期、高さ32.7cm

新資料紹介

〈自然〉マンモスおよびナウマンゾウの臼歯化石



展示中のゾウの臼歯化石

マンモスの臼歯化石は、大恐竜展で来日中のソ連科学アカデミー古生物研究所移動博物館の館長（N. N. クラマレンコ博士）が来沖した時に、資料交換を申しでて寄贈いただいたものである。化石は、マンモス（Mamuthus primigenius (Blumenbach)）の左下顎第三大臼歯である。臼歯の全長190㎜、歯冠の厚さ90㎜、歯冠の高さは、およそ200㎜で、シベリアのコリマ川近くで産したものである。樹脂加工されており、保存はよい。

なお、当館では、交換資料としてリュウキュウジカの骨格化石４点を寄贈した。

博物館では、これとは別のマンモス臼歯の化石（左下顎第三大臼歯、ドイツのライン川産）２個と、瀬戸内海産のナウマンゾウ（Palaeoloxodon naumanni Makiyama）の臼歯２個を購入した（昭和53年11月）。現在、これらの臼歯化石は、『ゾウのなかまの進化』とマンモスの復元図のイラストと共に、ロビー中央で公開展示している。

ちなみに、沖縄県からは、マストドンゾウと、ナウマンゾウあるいはアーキィディスコドンゾウの仲間に似たゾウの臼歯化石が発見されているが、標本は焼失したり、あるいは遠地にしかないため展示が困難であった。こういう状況下で、今回のこれらの標本類は、非常に示唆的であり、重要なものといえる。

新資料紹介

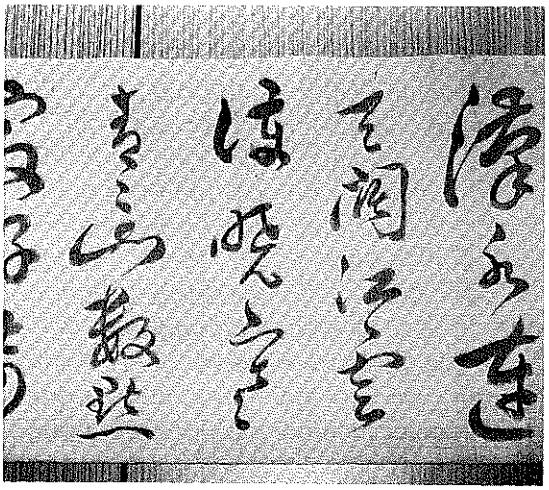
〈書〉鄭嘉訓書巻物

去る５月26日、東京在住で目下仕事の関係で滞在中の宮城安秀氏から「鄭嘉訓書巻物」一幅が寄せられた。

巻物は、珍しく芭蕉布を用いており、長さ10メートルにも及ぶ大作である。字体は草書体で書かれており、内容は、中国洞庭湖の風景をうたった古詩である。

作者の鄭嘉訓（1767～1832年）は、唐栄三十六姓の末裔で、若いころ中国に渡って書を学ぶ。長じて島津公に招聘され、薩州の藩士に漢字の書法を教授した。のち久米村の最高官たる久米村総役となり、紫金太夫と称され、古波蔵村の地頭として古波蔵親方と称された。19世紀沖縄最高の書家の一人で、その力強い筆法は、他に例を見ないほどである。

寄贈者の宮城氏は、那覇市首里の出身で、この巻物は祖父の代に入手したものであるという。



鄭嘉訓書巻物部分

資料寄贈者御芳名

仲地昌一氏（那覇市）　木臼
根路銘秀文氏（那覇市）厨子がめ
善国乗憲氏（那覇市）　籃山和尚壺他１点
比嘉文江氏（読谷村）　茶盆
永田芳子氏（那覇市）　浅地草花文様紅型着物
又吉誠睦氏（那覇市）　結び指輪２点
宮城ウタ氏（浦添市）　木綿維地経縞着物
金　晴江氏（韓国）　絵画（へちまとかぼちや）
山元　文氏（那覇市）　絵画（岬）
東恩納千鶴子氏（浦添市）燕氏の書
池寄正治氏（北谷村）　石おもり
平良亀順氏（佐敷村）　鉢
沖野千代氏（知名町）　芭蕉着物
宮里政章氏（那覇市）　荒焼御殿型厨子他23点
宮城光子氏（浦添市）　裁縫箱
伊東祐基氏（鎌倉市）　牡丹浮彫羽目板
伊藤勝一氏（高都市）　六論衍義大意全他４点
大里善誠氏（那覇市）　修業證書他178点
我那覇宗堅氏（宜野湾市）壺形土器
プロビンス・ヘンリ氏（米国）帆船芭蕉貼付文壺他13点
外間安真氏（那覇市）　三味線之説
奥浜真昌氏（那覇市）　木葉天目
善国乗憲氏（那覇市）　法林和尚骨壺
平安名常和氏（那覇市）乾隆通宝他
浜　兼一氏（宜野湾市）ノロ衣裳・神扇
新垣亀吉氏（糸満市）　ナガレキユウリイシサンゴ他１点
北九州市立自然史博物館（北九州市）魚化石デイプロミスタス他１点
奥田朝造氏（大阪市）　絹ウンモ紅レン片岩他17点
井上繁広氏（神戸市）　マテガイ化石
臼杵尚義氏（東大阪市）菫青石仮晶その他11点
山本勝吉氏（人尾市）　水晶その他３点
石橋　毅氏（福岡市）カブトガニ雌雄一対
尚　　裕氏（那覇市）　玉陵獅子レプリカ一対
糸数いつ子氏（知念村）イザイバナ他２点
諸喜田喜徳氏（那覇市）和文かな書他16点
George. H・Kerr氏（米国）バシホール琉球島航海記他16点
宮城安彦氏（東京都）　鄭嘉訓書巻物
長嶺将秀氏（那覇市）　達磨図
アルフォンス・コーン氏（米国）黒漆紋入捌箱
ソ連科学アカデミー　マンモス左顎第三大臼歯
仲尾次政剛氏（東京都）甕型厨子他17点
嘉数栄二氏（浦添市）　陶壺
（昭和54年４月１日～６月20日に寄贈されたもの）

昭和54年度博物館文化講座

第67回10月６日㈯　沖縄の古窯を語る
大城精徳氏（陶磁器研究家）
曽根信一氏（　〃　）
普天間敏氏（糸満高校教諭）
第68回11月３日㈯　映写会　賀数朝正技師
第69回11月25日㈰　史跡めぐり
知念勇学芸員
第70回12月15日㈯　グシクのはなし
嵩元政秀氏（興南高校教諭）
第71回１月27日㈰　沖縄中部の地質めぐり
大城逸朗学芸員
第72回２月23日㈯　沖縄の自然環境と天然記念物
新納義馬氏（琉球大学教授）
第73回３月22日㈯　熱帯から亜熱帯の白アリの生活
安部啄哉氏（琉球大学助教授）

第１回移動博物館（久米島）

（11月27日～12月１日）

移動展　戦前の沖縄写真展
沖縄の天然記念物の動物写真展
文化講座　１．久米島のおいたち
大城逸郎学芸員
２．沖縄の城（グシク）
名嘉正八郎副館長
映写会　沖縄の民芸他２本

昭和54年度特別展案内

10. 2～10. 14	やちむん会10周年記念「沖縄の古窯」展	やちむん会当館　後援
10. 17～10. 21	沖縄県芸術祭写真展	沖縄県教育委員会
10. 24～11. 4	国・県指定美術工芸展	沖縄県教育委員会
11. 7～11. 11	沖縄県芸術祭工芸展	沖縄県教育委員会
11. 14～11. 18	沖縄県芸術祭美術展	沖縄県教育委員会
11. 20～12. 2	南風原朝光・名渡山愛順遺作２人展	当　館

沖縄県立博物館だより　No. 7
発行年月日　昭和54年８月30日
編集・発行　沖縄県立博物館
所在地　沖縄県那覇市首里大中町１の１
〒903　TEL. 0988—32—2243
54—4353